metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University R

# 身体表現活動における学びの特性とリトミック

## ― 他者との関わりに焦点を当てて ―

Characteristics of learning in physical expression activities and Eurythmics

― Focus on interactions with others ―

長　島　　礼 *

**Abstract**

Physical expression plays an important role as a means of communication in infants, who have not yet developed verbal skills. Therefore, cultivation of infants' ability for physical expression leads to enrichment of their daily lives. In the present study, we investigated the educational significance of implementing Eurythmics in childcare, specifically regarding approaches for implementation that focus on the characteristics of learning through physical expression that arise from interacting with others, while making use of the characteristic musical education methodology of Eurythmics, specifically learning music based on physical awareness. We also investigated the potential contribution of Eurythmics to infants' learning through physical expression.

The results showed that in their daily lives infants have a sense known as "resonance" and that imitation in particular was emphasized as an act that promotes the understanding of self as well as others and enriches interpersonal relationships. The five functions of imitation reported in previous research are functions that are also cultivated in Eurythmics classes, and Eurythmics may therefore contribute to learning in this regard.

**キーワード：**身体表現、人間関係、リトミック

## はじめに

筆者は既報（2014）にて、1989年以降の「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」を整理し、保育における音楽活動の捉え方を踏まえた上で保育におけるリトミックの実態と比較し、保育にリトミックを導入する教育的意義と課題について検討した[1)]。周知の通り、我が国のリトミックは、1960年代以降、主に保育の分野において、その実態に即した形で精力的に普及されてきた経緯をもち、1989年に「幼稚園教育要領」が５領域に改訂され、保育における音楽活動のあり方が改めて熟考されると、リトミックもその影響を受け今日に至っている。現行の「幼保連携型認定こども園教育保育要領」では、保育における音楽活動のあり方として、音楽的能力や技能の向上ではなく、他者と関わる力の育成が重視されている。リトミックを導入する教育的意義についても、身体感覚で音楽を捉えるという音楽教育方法論としての特性を活かしつつ、他者との関わりによって生じる身体表現の学びの特性に着目した導入の意義を再検討する必要性がある。

そこで本稿では、まず、幼児が身体表現を通してどのような経験をしているのか、他者との関わりに焦点をあてた先行研究を概観し整理する。また、リトミック教育の概要を整理し、リトミックが子どもの身体表現を通した学びにどのようにアプローチしていけるのか検討する。

## １．身体表現における学びの特性

保育における子どもの身体表現活動として、鈴木（2013b）は、「『もの、こと、ひとなどの対象のイメージを身体で表す』『ごっこや劇という時空間を

* Rei NAGASHIMA　教育学部専任講師

1）長島礼 五味克久（2014）「保育におけるリトミックの意義に関する一考察―幼稚園教育要領・保育所保育指針における音楽とリトミックの比較分析―」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第８巻第１号 pp. 199-210

身体で遊ぶ』『音楽や音やリズムを用いて身体で表す』に大別される」[2]と述べている。本稿でもこの定義を援用するが、あえて子どもの身体表現活動を分類せず広く捉えながら人間関係との関連について述べていくこととする。

幼児の身体表現活動において、西ら（2005）は、「自己と他者の身体が自然に応答しながら、自他の境なく動きが進行する共振の感覚」があることを示しており、「保育者は子ども同士が生活場面や遊びの中で実感している共振の感覚を自らの身体に呼び起こし、子ども達の生活が共振しながら奔放に発展することへの理解を深めていく」ことが必要だと述べている。共振の感覚を身体に呼び起すことによって「保育実践における子どもと保育者との“共に”の世界が、より豊かに結実する」としている[3]。つまり、保育者自らが子どもの世界に飛び込み、子どもの世界で日常的に発生している共振という人間関係を体験することで、あたかも自他が同化しているような錯覚を起こしながら展開している子どもの世界への理解が深められる、としている。

また、古市（2007）は「身体表現の大きな幹となるのは模倣である」[4]と述べ、模倣という行為が人間関係の形成において重要な意味をもつと述べている。また鈴木（2012）も、子どもの身体による模倣において、模倣された子どもに着目し、模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能を明らかにしている。そこでは「①他者とかかわることの端緒が得られる、②他者の行為に気づき他者のイメージを認めて新たな行為が生まれる、③自己の行為のイメージに気づき行為が自覚的になる、④自己の行為のイメージに気づき他者とのかかわりが広がる、⑤自己が肯定され他者に対しての直接的な行為が生まれる」[5]といった5つの機能が示されており、「模倣されることは、他者からの受容、他者からの投げかけや認識となり、他者との様々な共同的な行為への手がかりとなる。子どもにとって、他者理解を通した自己理解が促され自分というものが他者によって成り立つという認識を促進させる役割を持つことが認められた」とし、模倣が他者との人間関係を築くきっかけになること、及び、自己理解や他者理解が促され、その人間関係を発展させていく手段になりえることを述べている。さらに大桑（2014）も「模倣することによって子ども同士が一体感を感じており、模倣は仲間関係を維持していくためにも機能している」[6]とし、模倣という手段によって他者と関わることで、仲間意識の芽生えや芽生えた仲間関係を維持する力が育まれていくことが示唆されている。

## 2．リトミックの概要

前項では子どもの身体表現における学びの特性について、主に共振や模倣について先行研究を基に整理した。本項では、身体表現を介したこのような学びに対してリトミックがどの様にアプローチしていけるのか、ということを言及する為に、ダルクローズリトミックの概要をおさえる。

### （1）ジャック＝ダルクローズのリトミック

ジャック＝ダルクローズは「音楽に於いて、最も強烈に感覚に訴え、生命に最も密接に結びつく要素というのは、リズムであり、動きだ」と述べ、聴く力の育成と身体感覚で音楽を捉えるという音楽教育方法論を創案した。その理論は、リズム運動、ソルフェージュ、即興の3つの主要な柱によって成っている。板野（2016）は、「リズム運動、ソルフェージュ、即興演奏の様々なサブジェクトの内容を学習することによって、音楽の様々な要素の『調和のとれた総合』を目指す音楽教育法がリトミックであるといえる。」と述べている[7]。

例えば、リズム運動、ソルフェージュ、即興のそれぞれは、22種の学習項目に分けられており、リズム運動では以下の内容が課題として示されている。

2）鈴木裕子（2013b）「保育者の資質能力としての身体表現の理解」保育学研究51(3)日本保育学会 p. 461
3）西洋子　野口晴子（2005）「保育者としての身体的感性を育てる教育―授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化―」保育学研究43(2)日本保育学会 p. 157
4）古市久子（2007）「身体表現の発達に関する研究の現状と課題」児童心理学の進歩46 p. 183
5）鈴木裕子（2012）「模倣された子どもにもたらされる身体に依る模倣の機能と役割」保育学研究50(2)日本保育学会 p. 144
6）大桑萌（2014）「0～2歳児の仲間関係における模倣の役割」保育学研究52(2)日本保育学会 pp. 172-182
7）板野晴子（2016）『日本におけるリトミックの黎明期―日本のリズム教育へリトミックが及ぼした影響―』ななみ書房 p. 11

1．筋肉の弛緩と呼吸の訓練
2．拍節分割とアクセントづけ
3．拍節の記憶
4．目と耳による拍子の迅速な理解
5．筋肉感覚によるリズムの理解
6．自発的意志力と抑止力の開発
7．集中力の訓練、リズムの内的聴取の創出
8．身体の均衡をとり、動きの連続性を確実にするための訓練
9．数多くの自動的作用の獲得と、自発的意思の動きでもってする動作との結合を交替を目的とした訓練
10. 音楽的時価の表現
11. 拍の分割
12. 音楽リズムの即時身体表現
13. 動きの分離のための訓練
14. 動きの中断と停止の練習
15. 動きの遅速の倍加や3倍加
16. 身体的対位法と
17. 複リズム
18. 感情によるアクセントづけ―強弱法（dynamiques）と速度法（agogiques）のニュアンス（音楽的表現）
19. リズムの記譜の訓練
20. 即興表現の訓練（想像力の開発）
21. リズムの指揮（他者―ソリストたちや集団の面々―に自分の個人的感覚・感情を速やかに伝達すること）
22. いくつもの生徒のグループによるリズムの実演（音楽的フレージングの手ほどき）

「他者と関わる力」に関連する課題としては、「6．自発的意志力と抑止力の開発」「20. 即興表現の訓練（想像力の開発）」「21. リズムの指揮（他者―ソリストたちや集団の面々―に自分の個人的感覚・感情を速やかに伝達すること）」「22. いくつもの生徒のグループによるリズムの実演（音楽的フレージングの手ほどき）」が挙げられる。いずれの課題もより深い音楽理解を促すための練習課題であるということを前提としながら、課題に取り組む過程では、自分と他者を意識し、自己表現力、自分はどうしたいのかという意志力や抑止力に関する能力、また、音楽を集団で表現する過程で遭遇する様々な課題を克服する力、協働の喜びや達成感を味わう経験などが課題として組み込まれていることが見出せる。リトミックのリズム運動は、全ての項目においてグループレッスンで行われることが想定されており、互いの表現（音楽理解）を認め合い摺合せ、さらには新たなものへと発展させる（音楽への理解を深める）経験をすることによる学習効果が期待されている。

### （2）リトミックに対するエリザベス・バンドゥレスパー（Elizabeth Vanderspar）の見解

ジャック＝ダルクローズの弟子で、音楽教育、リトミック教育に従事した、エリザベス・バンドゥレスパーは、エリザベス・バンドゥレスパー著 石丸由理訳『リトミック教育のための原理と指針　ダルクローズのリトミック』（ドレミ楽譜出版社、1996、全149p）において「リトミックの教育の目的・目標」について「全般的な要素」「音楽面での要素」「動きの要素」「芸術面においての展開」の4つの観点から整理している。本項では、彼女の著書を基にダルクローズの見解をより具体的に捉えていく。例えば「他者と関わる力」に関連すると思われる「全般的な要素」の項目では、リトミックのレッスンを通して以下のような諸能力が養われると示唆している[8)]。

<u>全般的な要素</u>

聴くこと
感覚を通して、音楽を理解すること
動きと音楽的能力の向上
緊張を緩和する力
リラックスできる力
社会性の認識（グループの中で、個々において）
記憶能力（長期間に及ぶもの、短期間のもの）
集中力
反応力、適応力（即時に、熟慮して）
学ぶ上での、注意力、自覚
分析力と統合力
修得した知識を他の場面にも転用できる力
他人のアイデアに順応できる力
他人のアイデアから新しいアイデアを想像できる力

8）エリザベス・バンドゥレスパー著石丸由理訳（1996）『リトミック教育のための原理と指針 ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社 p.12

個性を育て、自己を抑制したり、決断を促す力
自分の考えを明快に表現できる力
「心の中で聴く」力

また「音楽面での要素」では、以下の音楽的要素を理解することが目的として挙げられている[9]。

音楽面での要素
アナクルーシス（準備）、クルーシス（行為）、
メタクルーシス（帰着）
ダイナミックスとアゴーギグ（ニュアンス）
ハーモニー、ポリリズム、対位法
ピッチ、メロディー
リズム感（リズミカルな感覚、はずみ）
拍、拍子
音の長さ、パターン
機械的なリズム
自然なリズム
遊びのリズム
話のリズム
仕事のリズム
時間、タイミング、速度
構成と密度
音色
サイレンス
記譜（もし必要であれば）
フレーズと形式
レパートリー

バンドゥレスパーは「人格形成の段階でリトミックを経験した人は、いろいろな面でその経験を役立てることができます。」と述べている[10]。その理由は、「音楽面での要素」を学ぶことを介して付随的また必然的に「全般的な能力」も養われ、また養われた諸能力を多方面に活かす能力をも育成されるからだといえる。「全般的な要素」の項目における能力の大半は、音楽する人にとって必要な能力であるとともに、他者と関わる上でも必要な能力である。音楽への学びと同時にこれらの能力をも育むというリトミックの教育論をもってすれば、音楽の側面から、子ども達の身体表現活動における学びに対して寄与できると考えられる。

また、バンドゥレスパーは、前述した教育目標を実践に移すにあたり、「第４章　カリキュラムの手引」[11]において、子どもの実態について示している。表１は、子どもの実態のなかでも他者と関わることに関連すると思われる項目を抜粋し、年齢ごとに整理したものである。

表１では、３歳から６歳における子どもの実態（特に他者との関わりについて）が示されている。リトミックがグループレッスンを前提としており、そこに人との関わりが発生することを踏まえ、集団でのレッスンの利点を活かした指導計画を立てることが指導者の力量として必要であることが読み取れる。

## ３．全体のまとめ

本稿では、まず先行研究を基に、他者との関わりに焦点を当てた身体表現活動の学びの特性を概観し、子どもの身体表現活動における学びを整理した。その結果、幼児期の子ども達が“共振”という感覚をもって仲間と共に日常生活を過ごしていることがわかった。また、身体表現のなかでも“模倣”は自己理解や他者理解を促し人間関係をより豊かにする身体表現活動の幹となる行為として捉えられており[12]、その機能として「①他者とかかわることの端緒が得られる、②他者の行為に気づき他者のイメージを認めて新たな行為が生まれる、③自己の行為のイメージに気づき行為が自覚的になる、④自己の行為のイメージに気づき他者とのかかわりが広がる、⑤自己が肯定され他者に対しての直接的な行為が生まれる」の５つが示されていた。以下、これらを踏まえたうえで、他者との関わりに焦点をあてた身体表現活動にリトミックを導入する意義について考えていきたい。リトミックの指導者のバンドゥレスパーは、その著書の中で、リトミックのレッスンを通して養われる能力として「他人のアイデアに順応できる力／他人のアイデアから新しいアイデアを想像できる力／個性を育て、自己を抑制したり決断を促す力／自分の考えを明快に表現できる力」と

9）エリザベス・バンドゥレスパー著 石丸由理訳（1996）『リトミック教育のための原理と指針 ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社 p. 12
10）同上 p. 11
11）同上 pp. 44-57
12）鈴木裕子（2012）「模倣された子どもにもたらされる身体に依る模倣の機能と役割」保育学研究50（2）p. 144

**表１．E. バンドゥレスパーによる「カリキュラムの手引」より、各年齢における子どもの実態**

| 年齢 | 項目 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 社会性 | 動き | イマジネーション | 創造性 |
| 3・4歳児 | 子ども達に自信をつけさせること。活動が終了するたびに戻ることができる安心できる場所を確保すること。<br>空間認識が未熟。<br>仲間との活動より個人的な活動を好む。 | 子ども達が自然にできる動きを見つけ、その動きを音楽と結びつける。<br>身体の異なった部分を使う力を伸ばす。<br>協調性やコントロールできる力を伸ばす方法を考える。 | 視覚的、触覚的イメージから聴覚のイメージを喚起させる。 | 仲間のアイディアや動きを取り入れ、できるだけ自然に動けるようにする。<br>子どもの興味に沿った活動を取り入れる。 |
| 4・5歳児 | ある程度２人組で動くことが可能になる。慣れてくれば列や円体型も可能。<br>リーダーになる機会を与える、また簡単な決断を下す機会も与えることができる。 | 肉体的に強化し動きの質を高め自信を持たせるようにする。<br>より高度な柔軟性、高さ、スピード、コントロールが可能になる。<br>音楽や創造的なアイディアを通して、自分自身で新しい動きを考案する機会を与える。<br>素早く反応するゲームや、動きのある歌を喜ぶ。 | 子ども達にアイディアを尋ねたり、教えてもらうことが可能になる。 | 自分のアイディアを見つけ出すことが可能になる。個人のアイディアをグループ全体に適合させる工夫が必要。 |
| 5・6歳児 | 性格、思考過程、運動能力はかなりコントロールが可能である。<br>自由な様々なグループ活動が可能となる。刺激のあるゲームの後には安心できる場を設定し、落ち着きと集中を回復させる工夫をすること。<br>活動的で楽しい方法で学ぶことが理想的である。この年代の子ども達は、彼らの能力の範囲内で、チャレンジする事を喜び、しきりに、学びたがったり、問題を解決して上手にしたがる年頃である。 | 大股歩き、すべる、飛び越えるなど、よりダイナミックな動きや、よりゆっくりなスピードをコントロールすることが可能になる。<br>左右の理解も進む。<br>競争心が旺盛で、すばやく反応するゲームを好む。<br>音楽的な合図に、様々な動きで反応することを覚えておく能力も養われている。 | より自分自身のアイディアをもって参加できるようになる。作曲された音楽を実際に表すような短い動きを考え出して、その作品のフレージングや形を示すことが可能になる。<br>声や打楽器を使って短い音楽や動きを創ることが可能になる。<br>音楽と動きは、他の教科（国語、理科、算数など）の理解にも役立てることができる。 | |

（2016年 長島作成）

いった能力を挙げている。つまり、他者の考え方に気づき、他者の見解を認めて新たな行為を生み出す力、また、自己の考えを自覚し他者との関わりを深める自己表現力、を教育目的として挙げている。そしてこれらは模倣の５つの機能と酷似しており、つまりリトミックのレッスンにおいても模倣という手段が用いられる場面があるということ、また模倣の機能をより鍛えていこうとするリトミックのあり方が見出せたといえ、リトミックが他者と関わる力の育成に貢献できる可能性が示唆された。リトミックでは、個々人で音楽と向き合う時間と集団で音楽に向き合う時間がある。しかし、例え個人的に音楽と向き合う時間であっても、音楽を介して指導者との繋がりがあり、音楽教育という枠組みの中で、いつも他者との繋がりを意識したレッスンが展開されている。そこでは音楽することが自己表現することであり、また、他者を理解することや受容することであると強く意識させられる。保育における音楽活動においてリトミックの教育理論をどのように実践に落とし込んでいくかという課題はあるが、リトミックのこのような側面は、保育における音楽活動において求められている「他者と関わる力を重視した音楽活動」に寄与できるものと考えられる。

**【参考文献】**

小池美知子（2009）「保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響」保育学研究47(2) 日本保育学会 pp. 60-69

佐伯胖（2008）「模倣の発達と意味」保育学研究46(2) 日本保育学会 pp. 347-357

砂上史子　無藤隆（1999）「子どもの仲間関係と身体性―仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること―」乳幼児教育学研究８　日本乳幼児教育学会 pp. 75-84

田辺昌吾 江原千恵 内藤真希 古市久子 遠藤昌 松山由美子（2012）「身体表現の指導の現状に関する研究―保育者が指導する上で重要視している内容について―」四天王寺大学紀要54　pp. 271-280

中村雄二郎（1991）『臨床の知とは何か』岩波新書

那須川知子（2002）「幼児の音楽表現における身体の動きの意味」保育学研究36(1) 日本保育学会　pp. 245-251
新山順子　高橋敏之（2014）「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題」兵庫教育大学教育実践学論集第15号 pp. 79-87
西洋子（2001）「保育者の身体性」保育学研究39(1) 日本保育学会 pp. 12-19
野田寿美子（2014）「幼児の身体表現の育ちに関する事例研究―コミュニケーション力を手掛かりとして―」埼玉大学紀要 pp. 305-314
三浦雅士（1994）『身体の零度』講談社選書